インド最新事情（連載）第1回 ～鉄道は国家なり～

▲国立鉄道博物館の呼び物の一つ、Patiala State Mono Rail（1907年製、毎週日曜日運行）の傍らにて

インド三菱商事　上席取締役
吉野　宏

2007年はJR各社発足20周年、10月には私の故郷である埼玉県（さいたま市）に鉄道博物館が開館となった。インドでは、インド独立60周年、日印交流50周年をお祝いした。この機会にJORSA殿よりインドからの現地事情発信のご依頼があった。10年以上も実質インド（鉄道）事情に関する現地発信がなされていないとの事。私は経済誌にこれまで、2回ほどインドの鉄道関係で、2005年1月「鉄道で深まる日印協力関係」、そして2006年2月には「鉄道からつながる日印交流新時代」を現地発信させて戴いたこともあり、節目となる時期のインド現地発信に快諾。“インドは宝の山。インドのよさと将来性”を皆様にお伝え出来れば本望である。

1．投稿者紹介

振り返ると、私は1987年5月～1991年5月ボンベイに初めてインド駐在、その後、縁があって再び2002年8月からデリーに駐在して今年で通算10年になる。2007年6月迄ニューデリー駐在事務所長として、機械案件に係る現地対応を行って来た。鉄道関係ではデリーメトロを始めとする各種メトロ計画の関連商談や、インド国鉄向けには、貨物新線計画や夢のインド新幹線計画などを推進。2007年7月よりインド三菱に移り社長の補佐をやりながら、特定案件としてデリー・ムンバイ産業大動脈構想案件を全社案件として担当している。

東日本鉄道文化財団が運営する鉄道博物館の入場者が3月31日に100万人を突破。人気を集めている様で誠にお目出度い。私は昨年12月に訪問し話題となっているシミュレーターを見学した。又、クロード・モネがフランス鉄道発祥の地サン＝ラザール駅を描いた絵画「サンラザール駅の線路」（1877年作）を箱根にあるポーラ美術館（モネと画家達たちの旅―フランス風景画紀行特別展）に訪ねて鑑賞。おりしも昨年は1837年フランス初の公共蒸気鉄道がパリ＝サンジェ

ルマン・アン・レーに開通して170周年、このモネの作品の130周年であることを勉強した。小田急・ロマンスカーと箱根登山鉄道に乗った旅は快適。今年の元旦には仏陀涅槃の地クシナガール（「幸福の街」と言う意味）の大涅槃寺に初詣をした。インド国鉄,特急「ヴァイシャリ号」一等エアコン付き寝台デリー駅発19：50～ゴラクプール駅（最寄駅）着翌朝09：15（距離：788Km、往復運賃：約12,300円）を利用、定刻通りの旅であったが唯一トイレはタンクのないオープン方式が馴染めなかった。続いて、2月春休みに今度は豪華寝台列車「デカン・オデッセイ号」（ゴア～プーネ～アウランガバード～ジャルガオン～ナシック～ムンバイ）のツイン・コンパートメントに宿泊してゴア、エローラとアジャンタそしてムンバイ・CST駅の4つの世界遺産巡りを楽しんだ。正に動く5つ星ホテル。インド国鉄のサービスの質は全般的に向上し大変身を遂げつつあることを実感した。鉄道は国民の足や貨物輸送の交通インフラとして、又、絵画や映画の舞台となったり、はたまたテロの悲劇の舞台となったりその存在感は非常に大きい。特にインドにおいては、その存在感は非常に大きく国家そのものと言えるのではなかろうか。インドの人々にとって鉄道はインドの「Life line」である。インド国鉄は63,332Kmの全国大動脈を保有する公共機関で創業は今年で155周年。2006年1年間に運んだ乗客数は63億5千万人と全世界の人口に匹敵する。従業員は140万人と世界最大規模で、直接・間接的に関係する人々はこの8倍の1,120万人と推定される。去る2月26日ラルー・プラサド・ヤダブ鉄道大臣は2008年度鉄道予算を国会（下院）に提出、続いて29日チダンバラム財務大臣がそれ以外の同年度の国家予算を提出。同鉄道大臣は冒頭の予算説明にて、「親愛なる国会議長殿、私は2008年度の鉄道予算を誇りと満足を持ってここに提出する。これまで毎年成功を遂げながら都度目標を上げて来た。2005年配当前の現金黒字は900億ルピーから06年1,400億ルピーへ、そして07年は2,000億ルピー。今年8月国会では、07年度配当前の現金黒字が2,500億ルピー（約7,500億円）と再び新たな歴史が加わることをご報告できると確信する。」と語った。この何とも素晴らしいインド国鉄の変貌振りの背景について、スディル・クマール鉄道省特別補佐官は「たったの3つのキーワード；より早く、より重く、そしてより長い列車（貨車）、が成功への転換戦略の本質である。」と上記大臣答弁を紙上で補足している。2008年度国家予算と鉄道省予算は会計システムが違うので単純比較はできないが、国家予算支出額7兆5,088億ルピー（約22.5兆円で合計53の関係省庁で分け合う）と鉄道省の総収入額（Gross Traffic Earnings）8,180億ルピー（約2.5兆円）を比較すると、鉄道省の規模は国家支出予算額比約11%に相当。鉄道省予算がその他の国家予算と分けられてこの様に別個に先に国会に提出される伝統が独立以前から80年余りも続いていることや、その予算規模から言っても極めて大きな存在感が理解される。

さて、日印鉄道交流は近年では、日印経済協力案件の目玉として都市開発省が進めるデリーメトロ計画の大成功に始まり、それがバンガロールを始めとする多数の都市交通プロジェクトへと展開する一方で、インド政府が進める高速貨物専用鉄道計画へと発展しつつある。そして、その先に2007年度にインド国鉄がPre-Feasibility Studyを行うと発表した高速旅客専用鉄道構想（PPP－Public Private Partnershipがベースとなっている。）へと繋がる道筋が見えて来た所である。いずれも1兆円を超えるメガプロジェクトであり、役所の中でも取り分けて非常にプライドの高い鉄道省・インド国鉄へのアプローチに際しては日本の国益を考えた官民一体となった取り組みが求められていることを実感する。ここにBRICsの一角として全世界で注目されているインドの最新事情を鉄道を中心にさまざまな角度から4回に分けて紹介させて戴く。第1回はインドの多様性をご理解戴くと同時に私がデリーに駐在を開始した2002年度以降を政治・経済・鉄道分野の日印交流の歴史を簡単に整理して振り返りたい。第2回はインド最新事情、第3回はメトロ関係、そして最後の第4回はインド国鉄関係をご報告申し上げる。いささかでも皆様の日印鉄道交流の一助となりますれば幸いである。

写真2　聖地ヴァーラーナスイー（日本語名：ベナレス）
年間100万人以上が訪れる聖なるガンジス河畔の 一大聖地。ヒンドゥー教徒が最後を迎える地。

写真3　シャンテイニケタン（平和の家）、西ベンガル州
文豪タゴールが開設した学園。日本語学科もある。岡倉天心などがここでタゴールと一緒に生活した近代日印交流のスポット。毎年3月、学園は沙羅双樹の花が満開となる。

投稿するに当たり、日本大使館、JBIC、JICA、JETRO、そしてニューデリー日本人会の関係者の皆様、そしてJR東海やJR東日本の関係者の皆様、インド・日本商工会の吉村前会長（前インド三菱社長）の激励と貴重な写真のご寄贈を含む種々の協力に感謝申し上げる。

2．インドの多様性について

インドは無限の多様性が存在する神々の国、そして核の保有国。原子力発電所や宇宙ロケット発射センター近くの農村の台所では、今も牛糞が燃料として使われている。又、ジェット機が飛ぶ空の下、自動車が高速道路を走る現代においても、牛や駱駝そして象が荷物を運んでいる。コブラ使いから宇宙飛行士、出家行者、ヨーガ行者や魔女までいる。又、狼に育てられた2人の少女アマラとカマラの実話で有名なお国柄。ヒマラヤの大自然とそこに生息するさまざまな動物達。インド政府は目下絶滅に瀕している野生の虎の保護作戦を展開中であるが、阪神タイガースや虎屋が虎保護基金を通じてこれに協力。聖なるガンジス河に豊かな花・鳥・風・月。ガンジス河は遠藤周作の小説「深い河」の舞台となっているが、昨年、長澤まさみ主演のTVドラマ「ガンジス河でバタフライ」でも取り上げられた。花と言えば、国花である蓮の花、ヒマラヤの4千メートルの高地に咲く青いブルーポピーや平家物語に登場する沙羅双樹の花（3月満開）など季節折々の百花。最近は切り花（特にバラ）輸出が盛んである。花は鑑賞するだけではない。花から抽出されるアロマ・オイルが市販されている。赤いバラの花びらをお風呂に入れてバラのオイルを垂らしたバラ風呂は如何でしょうか。いろいろな楽しみ方をインドは教えてくれる。沙羅双樹の花からとれる沙羅オイルは日本にも輸出されている。古来、鳥はインドでは吉兆。季節の変化（雨季の到来）を知らせてくれたり、地球環境変化への対応を鳥から学ぶことが出来ると信じられている。国鳥は「孔雀」でいろんな場所でよく見かける。渡り鳥の宝庫。最近の話題はビールのラベルから就航3年目を迎えたインド民間航空会社；キングフィッシャーエアラインの翼のマークにもなった鳥、キングフィッシャー（カワセミ）である。風はなんと言っても、インドで大成功している代表的日系企業であるスズキ自動車の現地法人「マルチスズキ」のマルチ（「風神」を意味する）が有名である。日本では、風神と言えば琳派による「風神雷神の図」が有名だが、歴史的に見るとそこにはアレキサンダー大王による東方遠征に発するギリシャ～インド～中国～日本への長い歴史がある。インド人

写真4　2006年11月11日プラナキラ（16世紀の古城）でのイタリア祭
イタリアオペラ野外公園最後の場面：オペラ歌手2人（男女）が声高らかに「貴方は私の人生そのもの」と歌い上げて終了。イタリアオペラもインド映画も最後はハッピーエンドで終わる。

写真5　藤原正彦著「国家の品格」で紹介された20世紀の大数学者 ラマヌジャンの生家の居間（タミルナド州クンバコナムにて）

は占星術がお好きで月の満ち欠けに関心が高く満月を愛する。その昔、古代インドは月氏国（紀元1世紀～3世紀のクシャーナ王朝）或いは天竺とも呼ばれた。お釈迦様の誕生日、悟りを開いた日、そして涅槃の日は、南伝仏教国ではいずれも5月の満月の日として祝う。従って誕生日は毎年変わることをインドに来て知った。今年は5月20日がこの日にあたる。因みにインド中央政府が決めている祝日はたったの3日で；1月26日共和国記念日、8月15日独立記念日、そして10月2日国父マハトマ・ガンジーの誕生日、これは変わらない。

インダス文明から始まる5千年の歴史ある中で、日印関係に焦点をあてると、紀元6世紀の仏教伝来や752年4月9日奈良東大寺の大仏開眼供養に招かれたインド人僧正に始まる日印交流の歴史がある。ここであまり知られていない歴史を紹介したい。太平洋戦争勃発時、シンガポールやマレー方面で英国軍に抑留された日本人約2千9百人は2班に分けられて船でムンバイとコルカタに上陸。その後、汽車（貨車）に詰め込まれデリーに移された。最終地点はデリーのプラナキラ収容所。インド在住日本人130人余がこれに加わり、収容所生活を余儀なくされた。婦女子は合計で約千人余りであった。この地で他界した者もいた。先輩達の苦労が偲ばれる。今ではここは公園として整備されてデリー市民の憩いの場所となっており、2年前に私はここでイタリアオペラの野外演奏会を楽しんだ。又、記録上、日本人として誰が初めてインド鉄道に乗ったのか？私の知る限り、明治政府に紅茶の視察を命じられて日本人として初めてダージリンに到達した多田元吉の残した日記に拠れば、彼と彼の付き人合計3人は明治9年5月15日午後6時にカルカッタ・ハウラ駅から東インド鉄道の汽車に乗って真北に向かって出発し、25の駅を通過して翌日午前5時30分サイハクガンジに到着との記録が最古。

インドには、「ラーマーヤナ」と「マハーバーラタ」などの神話やその舞台となった名所、各宗教の定める聖地と旧跡が数多くある。一方、神様の化身と信者達から崇められている聖者サイババ2世と、インドに亡命中の活仏ダライ・ラマ14世と言う特別な存在感を持った人達が生きている。一方、過去においてはお釈迦様やインド建国の父マハトマ・ガンジー（1869年10月2日生まれ～1948年1月30日暗殺）等の世界の歴史に登場する偉人を数多く輩出。数学者・藤原正彦氏が著書「国家の品格」の中で紹介した、20世紀インドが生んだ高卒の大天才、数学者ラマヌジャン（1887～

写真6　グジャラート州バローダのマハラジャ宮殿”ラクシュミ・ヴィラ・パレス”にあるゴルフ場9番ホールからの眺め。1947年インドが独立する時、約560人のマハラジャがいたが、バローダはハイデラバードと並ぶ5大マハラジャの一つ。

写真7　2008年デリー発秋・冬物ファッションショー（3月12日初日のフィナーレを飾ったショーより）素材からデザイン発信基地へ、新たなバリューチェーンの構築がインドの国家目標となっている。

1920）もその一人でヒンドゥーの女神のお告げを受け、新定理を量産した神がかり的な数学者。世界チャンピオン（例：チェス）や産業界の世界王者（例：世界の鉄鋼王、IT王そして不動産王）もいる。又、1960年代の食糧危機を救ったインドにおける緑の革命の父、スワミナタン教授（1987年第1回世界食糧賞を授賞、現在は大統領選出の上院議員）も健在である。天啓聖典ヴェーダや永遠の哲学書バガヴァッドギーターが代表するインド思想・哲学。インド文学と言えば、アジアで初のノーベル文学賞を受賞した文豪ラビンドラナート・タゴール。近代日印交流はタゴールとの出会いに始まったとも言える。南インド・タミルナドゥ州に住む人口約5千万人のタミル人はインドの万葉集とも言うべき歌集サンガム（紀元前2世紀から紀元2世紀に作られたタミル語の歌2500首集めた詩集）を持っている。言語学上、このタミル語は日本語の起源との説もあり注目されている。インドは説話の宝庫でもあり、平安末期12世紀の作品である今昔物語（巻5第13話）に登場するかぐや姫の物語は、天竺から来た説話で、身を焼いた兎の話に遡る。マハラジャと宮殿、全国各州各地で（それぞれ固有の暦に従い）繰り広げられるさまざまなお祭り（例：3月22日Holi 別名・色の祭。色水や色粉を掛け合う春の大祭で、当日午前デリー地下鉄は混乱を避ける為全面運休した）。「冬虫夏草」を始めとするハーブ（薬草）や「ムミョウ」（西欧とロシアにおける名称。インドではシラジット、別名ラサヤン“若返りの泉”と呼ばれる）。を始めとする天然希少物質の自然治療剤とアユルヴェーダ（伝承医学）。香水や香木。日本ではヘナ（Henna、植物名）が白髪染めで有名だが、インドでは、女性は手足に美しい模様をヘナで染めたり、この花は香水として、種子は薬用として広く愛されている。 ヨガ・スパー・瞑想のヒーリングの世界（例；世界トップ10に入る高級SPAリゾート「Ananda in the Himalayas」）、中世大航海時代を演出し今でも世界に誇る香辛料、カレーを始めとするインド料理（大別してベジタリアンとノンベジタリアン）。一般的に、北インドの主食は麦、南インドは米。インダス文明は冬作物中心の農耕で、麦が主食であった。南北で共通しているのは豆料理でインド人は豆料理の天才で毎日食している。インドで体調を崩されたらキチディ（Khichdi）と呼ばれるお粥（緑豆が入ったターメリックで黄色く染まったお粥）がお薦め。特に糖尿をお持ちの方（インドでは5千万人いると言われる）に向いている。又、南インド料理で出てくる豆入りの米パン；豆が混ぜてありイドゥリと言う蒸しパンやウタパムというお好み焼き風のものもあ

世界最大のJCK宝石ショー（B2B）が2006年よりインド・ニューデリーにお目見え

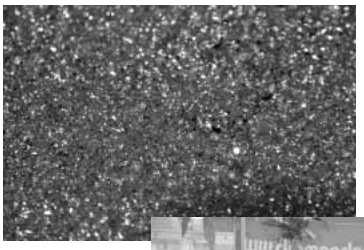


写真8-1　大皿に山と盛られたダイヤの輝き（2006年JCKより）

写真8-2　ピンク系の宝石・貴石を集めた宝石商のブース（2006年JCKより）

写真9　インドは太古からマンゴーの生産国で現在、世界の生産量の半分を占める。輸出品種アルフォンソー・マンゴーが4～5月旬を迎える。又、仏陀ゆかりのマンゴー（品種：霊鷲山産マルダ種）もある。
昨年7月7日第19回マンゴー祭（於：デリー）より

り美味しい。お国自慢の地酒も豊富で禁酒の州（例；グジャラート州）があったり、飲める州であっても禁酒の日があったりしてお酒の好きな人にとってはややこしいお国柄。最近はワイン作りが盛んになって来ている。ラジャスタン州ジャイプールのマハジャラ家に伝わる地酒で80種のハーブがブレンドされた蒸留酒（アルコール度数は42.8度）Royal Chandr Haasは我が家の言わば養命酒である。インドは世界一の紅茶生産国でもある。春（3～4月）のダージリン紅茶、夏（5～6月）のアッサム紅茶、冬（12月～1月）のニルギリ紅茶が定番。現在、ダージリンの一番茶が旬な季節を迎えている。

インドファッション、インド絵画、インド映画にインド音楽・歌謡。最近、のど自慢大会がインド各地で盛んになって来ている。ヒット映画「DHOOM」のバック音楽を歌った若手女性シンガー、シュレヤ・ゴシャールはのど自慢大会で優勝したベンガル人。このインド女性歌手と米国生まれのインド系2世歌手ノラ・ジョーンズ（彼女の父親はインド人のシタール奏者ラヴィ・シャンカール）の私はファンである。一方、映画（ボリウッドなど）俳優・女優の話を始めたらきりがないのでやめる。一方、最近、インドの現代アートがビジネスとしてブームとなっている。火付け役はインドのピカソと称される今でも健在な92歳の画家M F Hussein。最近、米国でのオークションで彼の一作品が160万米ドルの値がついて取引され注目されている。世界で一番繊細なインド綿、手編み物・刺繍やインド更紗などの繊維製品とそれに関係する染色・デザインの伝統技術。北インドの宮廷舞踊であるカタックダンスや南インドの寺院舞踊であるバラタナティヤムダンスなどの舞踊。2007年10月17日付けニューズウイーク日本版に特集された「世界が尊敬する日本人100人」の一人にインド古典舞踊オデイッシーダンスの舞踊家、小野雅子女史が選ばれている。この分野での日本人女性の活躍が注目されている。インドは美人大国でミスユニバース世界大会で2人そしてミスワールド世界大会で5人が栄冠に輝いている。その出場権を競うミスインド決勝戦は、毎年3月末・4月始めに（今年は4月5日）ムンバイで開催される。過去3年招待状を戴き観戦。毎年どこにこんな美人がいたのかと感激を新たにする。インド美人を飾る宝飾品の数々。それを支える宝飾産業は 益々隆盛である。その昔、インドはダイヤの産地であった。エリザベス皇太后の王冠を飾る「コヒヌール」（英国ロンドン塔博物館所蔵）そして呪われた蒼いダイヤとして有名な「ホープダイヤモンド」（米国スミソニアン博物館所蔵）がその代表である。

写真10　紀元7世紀玄奘三蔵が留学したナーランダ大学遺跡（世界遺産）ナーランダに玄奘祈念堂（中国政府建立）、そして奈良・薬師寺には玄奘三蔵院（玄奘の頂骨が分骨されている）があり、玄奘三蔵は印中日3ヶ国の架け橋となっている。

写真11　ヒマラヤ山脈、世界最高峰エヴェレスト（チベット名：チョモランマ、標高8848M）2003年5月22日三浦雄一郎・豪太父子登頂に成功。そして今年5月三浦雄一郎75歳の北面登頂の挑戦が始まっている。登頂アタックは年5月16日頃と本人よりデリー経由ネパール入りされる際にうかがった（3月21日）。成功をお祈りする。

現在インドはダイヤのカットと研磨産業の一大基地であり、1カラット以下のサイズのダイヤはほとんど全てインドを経由している。インド人は黄金が大好きでインドの金消費量は今や世界一。インドの宝飾産業は輸出額から言ってIT産業に次ぐ2番目の外貨獲得源として重要な産業となっている。その中心はグジャラート州スーラット。2006年から世界的な宝石ショーであるJCKがインドで開催を始め、今年は7月5～8日開催される。日ごろ見られない光景としてダイヤが大皿に山盛りになっているのを見ると、1個や2個と言わず両手ですくいたくなる。宝飾品コレクションでは、ハイデラバードのマハラジャ（在位1724年～1948年、イスラム教徒）が所有していたNizamコレクションが特に有名で1995年中央政府がこれを買い上げた。ダイヤモンド25,000個余り（カラット数は合計12,000カラット）、エメラルド2,000個（合計10,000カラット）その他ルビーと真珠の数々。昨年末デリー国立博物館で開催された特別展で一般公開されて私も鑑賞、インドの豊かさを目の当たりにした。ダイヤでは184.50カラットのThe Imperial（Jacob）Daimond（南ア産）が白眉であった。一方、インドは豊富な天然資源国（鉄鉱石やチタンなどの鉱物資源やえび・マグロなどの水産物資源、マンゴーなどの農産物が豊富）でもある。最近、マンゴーやキハダマグロ（さっぱりした赤身が美味）が日本向けに輸出が始まった。敗戦間もない頃の日本の経済復興と高度経済成長に貢献したのはインド鉄鉱石（1958年～1960年が最盛期）。敗戦の翌年1948年当時年間100万トン以下に崩落した鉄鋼生産を、日本は30年余で世界一の年間1億2千万トンへと百倍以上に増やしたが、その好スタートはインド鉄鋼石のお陰であった。日本はこのご恩を決して忘れてはならないと思う。

インドが人類史上で成し遂げた世界に誇れることの一つはゼロの発見。文献的に紀元550年ごろの天文学書「パンチャシッダーンテイカー」が最古である。インドでのゼロ記号には黒丸の「・」が使われた。インドで数としてのゼロが発見されて、その後イスラム文化圏を経て欧州全域に伝わり、数学史の発展において極めて重要な役割を果たした。

一方世界地図を見ると、インドはどこに位置するか？　大昔からアジアと中近東や欧州との間にいくつかの物資の交流の道が通じていた。紀元前2世紀中国と西アジアを結ぶ交易路「シルクロード」を知らない人はいない。玄奘三蔵（602年～664年）が仏典を求めてこの道を歩いてインドに留学・帰国した記録は大

写真12　サンチーの仏塔遺跡　（世界遺産）
この北門の石造彫刻は仏教芸術の最高傑作、特にヤクシ女神像（マンゴー樹下美人）が有名。2千年以上前の歴史遺産が眼前に広がる。

写真13　ダージリン・ヒマラヤ鉄道（世界遺産）
西ベンガル州ダージリンでは、紅茶、世界第3の霊峰カンチェンジュンガ山（標高8598m）、そしてこの通称トイトレインが名物。

唐西域記に纏められた。17年間歩きに歩いた距離は3万キロ。このとてつもない大旅行はのちの元・明の時代に小説「西遊記」になって孫悟空の物語として親しまれている。1986年著者は敦煌を旅して以来シルクロードの魅力にはまり、この6年間でガンダーラ、タキシラ、マトゥーラ、ナーランダ、ラージギル、ブッダガヤ、サンチー、ルンビニ、サルナート、ヴァイシャーリーなど彼が歩いた道を訪ねている。漢の武帝が体躯の堂々としたペルシャ馬の入手に執心したと言われるが、このために紀元5世紀に四川省からインドを経由してペルシャに通じる「天馬の道」。徳川8代将軍吉宗も馬の改良の為に、1728年インドから馬と白牛（「はくぎゅう」、こぶのある牛）3頭をインドより輸入した。この白牛の飼育と乳製品製造が日本の酪農の始まりとなった歴史がある。唐代に中国より南シナ海、ベンガル湾、アラビア海の港々に達していた「陶器の道」（海のシルクロード）も知られている。15世紀、鄭和はインド洋に7回も大船団を率いて乗り出した。これらより遥かに古いアジアの栽培稲もその故郷を何千年か前に出立して世界の各地に伝播した「稲の道」もあったであろう。2003年南インドの山中で約1億3千年前に分岐した新種のカエルが発見されて話題にもなった。このカエルは、進化地理学的にインドが独立した大陸であったことを物語っており注目された。更に約5,000万年前に遡ると、当時は鯨の祖先であるパキケトスが登場した時代。プレートテクトニクスによって、インド亜大陸（インド・オーストラリアプレート）はアフリカ大陸より離れユーラシア大陸（ユーラシアプレート）に接近し沈み込み、海底は押し上げられ後にこの海底がヒマラヤ山脈を形成した。現代を見れば、スマトラ島沖合いに沈み込んだ箇所は年間約5センチメートルの速度で沈み込んでおり、2004年末発生した超巨大地震（Mw9.2）スマトラ島沖地震の震源域。現代においては、インド洋海域は中近東産油国とわが国を結ぶ極めて重要な「オイルロード」となっている。インドは日本にとって国家の安全保障に関わる地政学上一つの要衝の地を占めている。私はそれらの名所旧跡を訪ねて一眼レフカメラ片手に果てしない旅を続けている。時には輪廻転生（前世、現世、及び未世）を教えてくれるという「アガステイアの葉」の予言を訪ねて、現世の時空を飛び超えて異次元への空想の旅も楽しんでいる。旅の乗り物は、鉄道、飛行機、自動車、牛車、駱駝、象、或いは想像力などさまざまである。鉄道を大別すれば、インド国鉄やメトロ。インド国鉄を利用して旅行する場合、次の様な4種；

● Palace on Wheels（25年の歴史を誇る、デリー

写真14　国連赤道賞を授賞したコーマル・プジャリ女史、ブニア族出身（2007年4月オリッサ州南部山岳地帯コラプットにて）2001年国勢調査で小数民族の人口は約68百万人、部族数は635。

写真15　仏跡地ヴァイシャーリーにあるアショカ王（在位：紀元前286年頃～紀元前232年頃）が建立した石柱（高さ11m）。柱頭には一匹のライオン像が飾られ、今でもまっすぐ立っているのが印象的である。

を基点にタージマハルとラジャスタン州の諸都市を周回する2,800Km、7泊8日のパッケージで一人約50万円），

- The Deccan Odyssey（2004年よりスタート、ムンバイを基点にエローラ、アジャンタ、ゴアを結ぶ2700Km、7泊8日の旅、1泊一人約5万円）、
- The Golden Chariot（2008年3月よりスタート、バンガロールを基点にマイソールやハンピなど南インド、7泊8日の旅、1泊一人約5万円）、
- Heritage on Wheels （ラジャスタン州都ジャイプールを基点に北部にある宮殿巡りの旅、3泊4日1泊一人3万円）、

の豪華なマハラジャ寝台列車と一般列車に大別される。電車、デイーゼル車、そして今も汽車が走っている。一般の場合クラスは一等から三等迄ある。又、ゲージも3種類；広軌（1,676mm）、標準軌（1,000mm）、狭軌（762mm）。日本で馴染みの無い広軌の感覚は、床に2つベッドを並べたコンパートメント寝台列車が可能な快適スペースと言える。傑作なのは、モノレールの汽車が鉄道博物館で今も走っている事だ（著者紹介写真をご参照）。全部でインドには世界遺産は27件（世界で6番目、アジアで中国に次ぐ2番目の件数）あるが、鉄道関係の遺産が3件もあるのはインドだけ。；ダージリン・ヒマラヤ鉄道（1881年開通した山岳鉄道）とチャットラ・パテイ・シバジ・ターミナル駅（1888年ムンバイ中央に完成。ゴシック建築様式）、そしてニルギリ山鉄道（1905年開通した山岳鉄道）。正に鉄道王国だ。

インドの性別は、男性（M）、女性（F)と第３の性（所謂ヒジュラ）。戸籍・住民届け制度はなく、結婚形態は一夫一婦、一夫多妻、一妻多夫と多様で婚姻届の制度はあっても義務はない。解剖学者 養老孟司氏がその著書「バカの壁」の中で完全ワークシェアリングと紹介している「カースト制度」。又、日本の戦後、食糧難の時代にあった米穀通帳に相当するラーション・カード（米や砂糖など特定の生活必需品の配給制度）や政府の市場価格統制制度（インド国鉄運賃や農民向け肥料販売価格、そしてディーゼル油や灯油などの石油4品目の小売価格）。多民族、多宗教、多言語で現在11億人余りの人口を抱え毎年約2千万人ずつ増加している人口大国。国民の平均年齢が25歳という若者の国だが、一方で、一部の地域では男女出生比率に極度のアンバランス（男尊女卑）が生じて未解決のままである。中央政府は実態改善に乗り出し、5つの州を選んで女子の出生・養育を援助する奨励金を交付するスキームをつい最近決定したと報じられた。インド東部・オリッサ州の最も後進的で飢餓危険地帯に住む少数部族出

写真16　TATA自動車が発表した国民車”NANO”世界で一番安い超低価格車（ニューデリーで開催された2008年1月第9回AutoExpoより）

写真17　発展目覚しいデリー首都圏、ハリアナ州グルガオン中央にあるゴルフ場（DLF　Golf and Country Club）9番ホールグリーンの眺め

身のコーマル・プジャリさんが2002年度国連「赤道賞」に輝き注目された。この部族の女性達が、村落レヴェルで遺伝子銀行、種子銀行、水資源銀行、食糧銀行を組織化して、生産と食糧の保全を同時に確保していることが評価された。彼女は勿論英語は話せない。我々がお相手するインドビジネスマン、政府高級官僚、弁護士に会計士、そして時に政治家は英語、ヒンデイー語に出身州の言語の少なくとも3ヶ国語を話す。英語が通じる事はビジネスコミュニケーションする上で真にありがたい。しかし注意が必要である。インドで”ファースト・フロアー“と言うと、日本で言う2階に当たる。日本で言う1階は、インドではグランド・フロアーである。今年3月17日タミル・ナードゥ州では、インド初の行政措置として公式に第3の性としてM（男性）、F（女性）に加えて、T（Transsexual)というという記述欄を公共福祉申請書欄に儲けることをスタートさせた。又、歴史のある英単語も興味深い。“POSH”とは今でこそ一つの単語として使われているが、語源は大英帝国時代に遡る。POSHとはファーストクラスの船のチケットの意味であったと言う。“Port（左） Out, Starbord （右）Home”の頭文字。ロンドンからボンベイに向けて船旅する際は西陽の入らない左側、逆にロンドンに帰る際は右側の席が一等であった。最近、雑誌に男性に混じってポロを嗜む上流社会の5人の若き令嬢達が“POLOS POSH PLAYERS”との見出しで紹介された。実際にインド人と会話すると、独特のアクセント、巻き舌、そして首を横に振りながら当方の言うことを肯定する身振りなど実際に戸惑うことが多い。私の経験から言って、インド人と英語できちんと議論や会話が出来るようになるには、相手にもよるが慣れと度胸に多少の時間を要する。さすがにシン首相やチャタジー下院議長の英語はわかりやすいが、大臣や州首相の英語は時に聞きずらい経験を筆者はしている。

カースト外で差別された出自を持ち、後に仏教に帰依した法曹家アンベードカル憲法起草委員会委員長が独立後の憲法を起草し1950年1月26日に施行された。インドは世界最長の憲法を持つ法治国家である。太古の時代、仏陀が活躍した2500年前頃の当時、既にハッジ国（都；ヴァイシャーリー）では共和国政治が行われていた。そして現在、インドは有権者がざっと6億人の世界最大の民主主義国家であり、選挙は電子投票で行われている。次回の総選挙は遅くても2009年5月である。大統領がヒンズー教徒、副大統領がイスラム教徒、首相がシーク教徒、そして与党党首がカトリック教徒と言うコンビによるリーダーシップで今のインド

写真18　デリーメトロが日印協力のシンボルであることを示す帯・セントラルセクレタリアート駅（JR東・五十嵐課長よりのご寄贈）

写真19　麻生前外相に円借款に感謝する旨説明するデリー 地下鉄公社スリーダラン総裁（2006年1月セントラルセクレタリアート駅構内の 掲示板前にて、撮影者不詳）

政治は動き、経済は巡航速度GDP8～9%の高度成長をひた走る。昨年1年間でインドの株価は46%も上昇した。日系企業のインド進出は現在2輪・4輪の関連会社が主だが、インドの乗用車市場は今年1月一台28万円と言う超低価格車「NANO」をインドのタタ自動車がニューデリーで開催された自動車ショーで発表して世界中の話題となっている。一方で、1億円以上もする超豪華な車もあり予算と目的に応じた品揃えが豊富な市場で、自動車業界とファッション業界が手を組んでお互いの販売促進を行っている。小型車部門で先頭を走るマルチ・スズキは2010年までに年間100万台生産しうち20万台を欧州を中心に輸出する計画を進めている。一人当たりのGDPは2007年度に1,000ドル（名目）を超えるが、一方で、一日1ドル以下の貧困者はざっと3億人いる。この貧困者救済を目指すNGOの団体数は100万以上もありインドはNGO大国でもある。NGO無くば、工業用地買収に伴う住民移転問題は解決できなのがこの国の実態である。米誌フォーブスが2008年3月に発表した世界ビリオネア番付け（総資産10億ドル以上）を見ると世界の大富豪トップ10人中インド人が4人もいて資産100億ドル以上に8人もランクされている。相続税が無いので金持ちになると没落しにくい環境となっている。英国植民地時代（日本では江戸時代）に、英国によりアジアで初の鉄道が敷かれゴルフ場がオープン。インドで最も歴史のあるゴルフ場はロイヤルカルカッタゴルフクラブ（1829年オープン）で英国外では最も古い歴史を誇っている。現代のゴルフ場は一般的に高級住宅とセットで開発されている。かつてのマハジャラ達の中には自分の宮殿をホテルにしたり、敷地内にゴルフ場をオープンしている者もいる。競馬場やポロ競技場もある。毎年2月始めにムンバイの競馬場で開催されるインドダービーは紳士と淑女が着飾って春を祝う風物詩ともなっている。しかるに、何と言っても11億人のインド国民はクリケットに熱狂する。テニスについては、イスラム教徒の女子プロテニスプレヤー、サニア・ミルザ（21歳、世界最高ランクは2007年8月27日付け女子シングル27位、2003年ウィンブルドン女子ダブルスで優勝）が大人気。デビスカップ2008男子テニス国別対抗戦アジア・オセアニアゾーン　グループ1の2回戦（日本対インド）が4月11～13日デリーで開催。これまで過去の 対戦成績は、日本の3勝17敗。

何事も多種多様な事、かくの如し。語りつくすことが出来ない。語りつくせないインドだからこそ、どんな切り口からでも語れる。人によって言うことが正反

写真20　今年155周年を迎えるインド国鉄本社（鉄道省公舎）正面ゲート。玄関では、インド国鉄の安全運行シンボルマスコット象 " Bholu " が出迎える。付近には、デリー地下鉄セントラルセクレタリアート駅出入口がある。

写真21　国父ガンジーと鉄道（ガンジー・スミリテイー博物館に掲げられている写真）1983年8月（真冬）夜9時過ぎ、南アフリカPletermaritzburg駅で一等車より放り出された場面

対になることがある。光と影、富と貧、勝者と敗者、聖と俗、浄と不浄、乾季と雨季、大都市生活者と原始生活を送る少数民族、などなど言わばコインの表と裏で、どこに焦点を当てるかで話は正反対になってしまう。それ故に平均的な話はインドではあまり用をなさない。インドの鉄道はこの両極を結んで年々歳々延伸されて行く。知らない世界の発見が多いので、のんびり行くインド鉄道の旅は誠に興味深い。インドの歴史は、神話から宗教、哲学及び思想、そして科学及びハイテクへと発展し、産業は今やアウトソーシング先からテクニカルイノベーション発信基地へ、素材産業からデザインの発信基地へと移り変わろうとしている。次々刻々と変貌しつつあるインドと変わらぬインド、インドはわかりづらい不思議な国である。花の都のニューデリーは世界各国の首脳、ビジネスマン、アーテイストや観光客の往来で一年中賑わって来ている。この2～3年で政治、経済、学術、文化・芸術、観光などの交流が全世界規模で盛んに行われるようになった。インドは今、世界で非常に注目されている国。全般的に見ると日本はインドに出遅れている。これはインドは否定的に見られがちなお国柄であるからで、その意味で是非出来るだけ正確に **" 巨象インドの全体像 "** の動向を理解して貰いたいと思うのである。

3．2002年度～2007年度を振り返って

先ずは、私がデリーに着任した2002年以降をざっと振り返ることにしたい。

●2002年度（GDP8.3%）

★日本の鉄道開業130周年（1872年10月14日新橋＝横浜間）

★日印国交樹立50周年（1952年4月28日）

★デリーメトロ開業（2002年12月25日シャーダラ＝テイスハザリ間地上・高架の6駅で8.5Km）

1）日印国交樹立50周年

戦後の日印関係は1952年4月28日外交関係が樹立した。日本が世界に復帰したサンフランシスコ講和条約が発効する前に、インド政府は両国間の戦争状態の終結を告示によって宣言されたことに始まる。インドはこの条約には不参加で2ヶ国間でより日本に対し寛大な平和条約の締結を行った。インドの親日感情と日本への好意の現れであった。デリー日本人会では、平林元大使のご協力を得て、「Sangam（日印国交樹立50周年記念文集）」を編纂・発行してお祝いした。又、イン

写真22　インド国鉄元総裁（兼）鉄道省元次官　Mr.R.K. Singh初の日本ご訪問（2004年11月　世界高速鉄道国際会議2004、会場となった帝国ホテルにて）

写真23　小泉元首相デリーメトロ試乗・セントラルセクレタリアート駅（撮影者不詳）

ド商工会議所（FICCI）は、「INDIA & JAPAN Global Partners」を発行しお祝いしてくれた。2003年1月川口元外相がデリーを訪問。「グローバル・パートナーシップ」を戦略的な視点から強化することで合意。

2）デリーメトロ（DMRC）の開業

12月、第1期計画全長65Kmの内、1号線シャーダラ＝テイスハザリ間（地上・高架の6駅で8.5Km）が開通となり、インドの都に初の地下鉄が誕生。この計画には日本の円借款が供与され、日印協力の象徴となる大成功プロジェクトとして以後語り継がれる。私もこの式典に参列し新時代の到来をお祝いした。この開通日の模様を伝える現地新聞報道を参考までに紹介する。

「前日24日バジパイ前首相がカシミリゲート駅より最初の乗客としてチケット（トークン）を購入（初乗り6ルピーで約18円相当）した上で試乗し開通式典が行われた。一般開通は25日。デリー地下鉄は初日、約120万人のデリーっ子が6つの駅に殺到し大混乱に陥った。警備陣が人々をさばききれず、一時はシャッターを閉ざす駅も出た。翌26日に漸く正常運行した。乗客の混乱を招いた電子チケットにとって代わり、ホームあふれ返っていた乗客は70人ものデリー警察隊が整理、誘導した。初日の混乱を招いた理由とされるマナー違反を重く見た当局は何人かの乗客を拘留する騒ぎとなった。」

●2003年度（GDP8.5%）

★インドの鉄道開業150周年（1853年4月16日ムンバイ～タネ間35Km）
★世界で初めて地下鉄開業140周年（1863年1月ロンドン、メトロポリタン鉄道）
★日本で貨物鉄道開業130周年（1873年9月15日新橋＝横浜間28.8Km）
★日印協会創立100周年（1903年・明治36年長岡護美、大隈重信や渋沢栄一が創立）
★英国初の高速鉄道開業（2003年9月英国側の高速新線Channel Tunnel Rail Link のセクション1 74Kmが開業 営業最高速度時速300Km）
★中国・上海で世界初の商用リニアモーターカー「上海リニア」開業（2004年1月　上海龍陽路―浦東国際空港　30Km、最高時速430Km）

1）インド鉄道開業150周年

記念行事の一つは、インドの国父マハトマ・ガンジーと鉄道と言う講演が行われ記念出版も行われた事。インド人なら誰でも国父が23歳の時、1893年南アフリカのプレトリアに弁護士として赴任する途

写真24　小泉元首相歓迎昼食会のテーブル（撮影者不詳）

写真25　小泉元首相はカレーが大好き
昼食会のマトンカレーに大喜び（撮影者不詳）

中、ダーバンから1等客室の予約席に乗車したが、7月1日夜9時マリッツブルグ駅で白人が同じ一等客室に入って来てインド人（ガンジー）と一緒にいられないという事で列車の係りから一方的に出て行く様に強要されこれを拒絶した結果、列車から真夜中の冷えきった高原駅に放り出されてしまったシーンを覚えている。この事件が、ガンジーの人種差別、英国の帝国主義との戦いの始まりとなった。ガンジーはインドでは生涯3等列車に乗るのが常であった。英国によるインド搾取の象徴である鉄道に厳しい批判を行ったことも有名な話である。

2）BRIC sレポート

2003年10月米系投資会社ゴールマン・サックスの有名なBRIC s　レポートが発表された。BRIC ’s時代の到来が宣言されて以来、インドが世界で何かと注目を浴びることとなった。

●2004年度（GDP7.5%）

★新幹線開通40周年（東京＝新大阪間515Km、1964年10月1日開業）

★韓国高速鉄道開業
（ソウル＝プサン間440Km，2004年4月1日開業最高速度時速300Km）

★バンコック地下鉄開業（2004年7月3日Hua Lampong駅=Bang Sue駅20Km）

★日本初の商用リニア　万博交通システム「リニモ」（東部丘陵線）開業（2005年3月6日　藤ゲ岡＝八草町8.9 Km）

★スペイン列車爆破事件（2004年3月11日マドリッド）

★地下鉄サリン事件より10年（1995年3月20日東京メトロ）

1）政権交代

5月に総選挙が行われて政権が交代し、現在のマンモハン・シン政権が6月誕生。一番興味深かったことは、政府与党BJPは好調な経済発展を背景に、“India shining”を謳い文句に選挙を闘い、マニフェストには高速旅客鉄道が公約された事である。ムンバイ＝アーメダバード間がその有力候補に上がった。しかるに与党は敗退したので、以後新政権により言わばインド新幹線計画の行方が注目されることとなった。

2）インド国鉄総裁の訪日、初めて新幹線のぞみに乗車

11月インド国鉄　シン元総裁（兼鉄道省元次官）が初の日本訪問。“It was wonderful, wonderful. so

写真26　シン首相の衆議院での国会演説、「インドは国際的な核軍縮を進める約束に変わりはない。」ことを強調。日印経済協力の強化と米印核協力への理解を求めた。
（2006年12月、撮影者不詳）

写真27　2007年8月安倍前首相のインドご訪問
安倍前首相がインド国会（下院）演説の為、国会に入場する場面。前首相は、「2つの海（太平洋とインド洋）の交わり」と題する演説を行い、両国関係の一層の強化をインド全国民にアピールした。
（実況生放送する現地TVより）

nice.”インド国鉄元総裁ご一家と一緒にインドより東京にやって来て、この元総裁の言葉がむしょうに嬉しかった。11月10日午前10時26分東京発京都行き新幹線のぞみ119号に乗車。新幹線の感想を満面の笑みで応えてくれた。シン元総裁は欧米には数知れず訪問し、仏のTGVや独のICE、そして米のアセラエクスプレスと言った高速鉄道には何回と無く乗車した経験があるが、何故か日本の新幹線とはこれまで縁が無かった。概してインド国鉄要人はそうである。JR東海とJR西日本が新幹線開通40周年を迎えて主催する世界高速鉄道国際会議2004にインドが初めて招待された。

3）インド新幹線JETRO　FS

3月JETRO地球環境・プラント活性化事業等調査案件として、「インド国高速鉄道導入可能性検討に係るF／S調査」報告書が完成。対象区間ムンバイ～アーメダアバード間約500Km。路線は4駅区間①ムンバイ（人口1,600万人、商業の中心）～スーラット（293Km、人口500万人、ダイヤモンド＆繊維産業地）～バドーダラ（129/422Km、人口360万人、石油化学産業）～アーメダバード（100/522Km、700万人、州都、繊維産業）、営業最高速度：時速300Km、ゲージ：1,435mm

●2005年度（GDP9.0%）

★世界初の鉄道開業180周年

1825年英国ロンドン、ストックトン＆ダーリン鉄道、「鉄道の父」ジョージ・ステイーブンソンの製作した「ロコモーション号」が列車を牽引。

1）小泉元首相、インドご訪問

4月小泉元首相がデリーを訪問。首脳会談にて、アジア新時代における日印パートナーシップ～日印グルーバル・パートナーシップの戦略的方向性～に関し協議され、パートナーシップを強化する為の8項目の取り組みが合意された。この項目の1案件として、本邦技術活用（STEP）制度を利用しつつ、高容量貨物専用鉄道建設計画（ムンバイ／デリー線、デリー／ハウラ線）の実行可能性を検討することが合意された。デリーメトロにご試乗された。

2）ブッシュ大統領のインド訪問

1月ブッシュ大統領は一般教書演説の中で、「われわれは中国とインドのような新たな競争相手に直面している。」とインドを位置付けた。インドの存在感が急速に高まって来ていることが世界中に印象付けられた。3月1～3日ブッシュ大統領はインドを公

写真28　2007年8月安倍前首相夫人のデリーメトロ試乗・セントラルセクレタリアート駅
（JBICよりのご寄贈）

写真29　Exporail India 2007 展示会開催
JORSAブース

式訪問。一行は随行員を含め千人余り。首脳会談で原子力協力などが合意された。核不拡散条約（NPT）を不平等条約として加盟していないインドが、米国より核保有国としての認知を得て原子力発電に向けた協力を引き出した代わりに、インドは民生原子力施設を査察の対象とすることに合意。株価は続伸。大統領は、「民主主義を世界で始めて体現した米国と世界最大の民主主義国家インドは21世紀の世界の繁栄とテロとの戦いにおいて一緒に世界をリードして行く。」と演説した。

3）デリーメトロ1期計画の完成・全線開通

2006年3月デリーメトロ1期計画（地下・地上・高架で3路線、全長65.1Km）が全線開通した。

●2006年度（GDP9.4%）

★台湾新幹線開業（2007年1月5日 台湾=高雄間345Km）
★インド・ムンバイ列車同時多発テロ（2006年7月11日、於：ムンバイ）
★インド・パニパット特急列車炎上テロ（2007年2月18日、於：パニパット、デリーの北100Km）

1）専用貨物新線計画JICA FSが開始

6月、インド鉄道貨物輸送の約65%を担っているデリー～ムンバイ間、デリー～コルカタ間（総延長約2,800Km）における貨物輸送力を強化する計画について、JICAの調査が開始された。

2）シン首相政府インフラ諮問委員会にてPPPについて講演

10月7日デリーでのConference on Building Infrastructure： Challenges & Opportunitiesにて、第11次5ヶ年（2007-12）計画ではGDP8%成長を持続する為には総額3,200億ドルの巨額なインフラ投資が必要であり、その為には民間投資が必要とPPP（Public Private Partnerships）を提唱。

鉄道セクターで野心的な3兆ルピー（約9兆円）の投資が計画され、その内40%を民間投資に期待したい旨の発言があった。

3）シン首相の日本訪問

12月14日（木）～15（金）マンモハン・シン首相（ビジネス界一行70名が同行）が訪日した。同首相に14日天皇皇后両陛下が御引見。そして「インドは国際的な核軍縮を進める約束に変わりはない。」と国会演説を実施。日印経済協力の強化と米印核協力への理解を求めた。安倍前総理と首脳会談を行った。

4）日印鉄道セミナー

07年2月　日印鉄道セミナーの開催（JORSA殿主催、インド国鉄、デリーメトロ公社の後援）日本の貨物鉄道の先端技術の紹介とメトロ計画向け日本の技術を紹介した。

5）高速旅客鉄道計画

07年2月、鉄道省は、鉄道予算の中でインド国鉄は高速旅客鉄道に関する

Pre　F／Sをその導入に興味を持つ州と共同で実施するベースで行うことを発表。国会で後にその予算が承認された。

●2007年度（インド政府の2008年2月に発行されたインド経済白書のGDP成長予想値：8.7%）

★国父ガンジーの誕生日（10月2日）が国連非暴力日（2007年5月国連総会にて決議）

★インド独立60周年（1947年8月15日独立）

★インド独立闘争150周年（1857年セポイの乱）

★日印文化交流50周年（1957年日印文化協定締結）

★日印外交170周年（1907年3月16日コルカタに日本総領事館の開設）

★日印観光交流年、

★国鉄民営化20周年（1987年4月JR旅客6社、JR貨物発足）、

★日本でメトロ開業80周年（1927年12月30日、上野＝浅草間2.2Km）

★鉄道博物館（10月14日埼玉県さいたま市にオープン）

★首都圏の自動改札機がダウン、260万人に混乱（10月12日早朝、JR東、私鉄、地下鉄の合計662駅、約4,400の改札機が一斉にストップ）

★平和の仏舎利塔がデリーに落成・落慶法要（デリーの新たな観光名所）

★JR東海　中央新幹線計画を発表（2007年12月25日発表）（超電導リニアによる路線290Km、2025年完成目標、総投資5.1兆円）

★円借款事業が鉄道分野で世界初のCDM事業登録～インド・デリー高速輸送システム建設事業～

★シン首相が中国公式訪問（1月13～15日）中印鉄道協力に関するMOAが調印。

★仏サルコジ大統領が公式訪問（1月25日～26日）フランス国鉄とインド国鉄は高速旅客鉄道プロジェクトで印仏協力のMOUを調印。

★インド経済白書（2月28日付け）において、インドは一人当たりのGDPで史上初めて1,000ドルを突破すると発表された。

1）インド国鉄バトラー前総裁が日本の鉄道事情視察

高速旅客鉄道に関して日本の技術に関心があることから、事情視察の中心は新幹線であった。

2）安倍前首相のインドご訪問（ニューデリー、コルカタ）

8月　安倍前首相のデリー・コルカタ訪問。これに併せて200名近い経済ミッションがインドを訪問。首脳会談後、新次元における戦略的グローバル・パートナーシップのロードマップに関する共同声明が発表された。安倍前首相より幹線貨物鉄道輸送力強化計画について、本邦技術活用条件STEP）を活用した円借款による支援を前向きに検討したい旨表明。昭恵夫人がデリーメトロに乗車された。

3）貨物新線計画JICA　FSが完成しインド政府に提出

10月　JICA幹線貨物鉄道輸送力強化計画調査　最終報告書の完成

対象区間　西回廊1,468Km；ムンバイ＝デリー（ダドリ）
　　東回廊1,309Km；ルデイアナ＝ソンナガール

ゲージ：1,676mm、最高速度：時速100km、
　　列車牽引方式：電気機関車

概算事業費：西回廊＝約2,900億ルピー（約8,700億円）、
　　東回廊＝約2,100億ルピー（6,300億円）

4）Exporail India　2007　展示会（於：ニューデリー）

10月、日本JORSAを含め11の諸外国より最新の鉄道技術が紹介された。

チベット・聖峰カイラース山（標高6656M）

今年は源氏物語千年紀。若菜上に吉兆の山として登場する須弥山は、古代の日本人が西方浄土として崇めた山である。この山は仏教界では世界（三千大千世界）の中心に聳え立つ山として、ヒンズー教では破壊の神シヴァ神が苦行に励む聖峰、至高の天として君臨する存在と崇められている。現在、この山は中国のチベット自治区（1959年中国人民解放軍が占領）に位置する。写真はチベット仏教高僧Tenzin　Priyadarshi上人が2004年この山を巡礼した際に撮影したものをご寄贈戴いた。

インド・マハラシュトラ州エローラ洞窟石窟寺院郡（世界遺産）の中心にある一際聳え立つNo.16窟カイラーサ寺院

本堂の高さ36m、幅33m、奥行き50m。建設は757年スタートし220年を要し979年完成。

一つの岩山を上から掘り下げて非常に精巧に作られている。正に崇高で壮大な神殿。

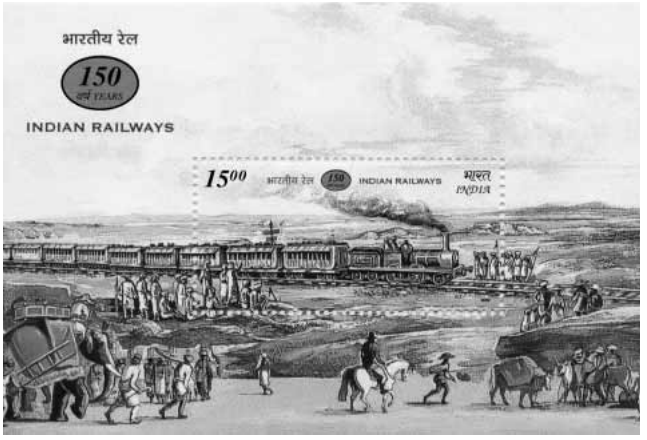
この寺院、アンコールワットやボルブドゥールはカイラース山をイメージして作られているという。本堂の背後の最上部には5つの小寺院がある。これは、バラモン教の聖典、ヴェーダ（紀元前1200年頃）に納められている万物を構成する5元素；地球（黄）、天空の霊気・精気（黒）、空気（白）、水（青）、そして火（赤）を祀っている。広島県仙酔島にはこれと関連する五色岩がある。

インド国鉄

1853年4月16日インド鉄道はボンベイ～タネ間　33.6km（所要時間：蒸気機関車で45分）で開業。この年、日本はペリー艦隊浦賀沖来航の年にあたる。2003年150周年記念切手が発行された（国立鉄道博物館で4,500円で購入）。ムンバイCSTは完成110周年を迎えた。2007年世界遺産に登録されたヴェネチアゴシック建築様式の古風な建物。

現在一日約20万人が利用している。

インド鉄道発祥の地ムンバイ Chhatrapati Shivaji Terminus

（世界遺産、所謂インド国鉄ムンバイ 中央駅、建設期間：1889～1897年）

インド鉄道150周年記念切手